

令和6年度 学校評価総括表 伊丹市立 伊丹幼稚園ありおか分園

教育目標		心豊かに共に育ち合う子どもを育てる						
重点目標		子どもが心豊かに共に育ち合う保育を推進する。 地域に関わった幼稚園づくりを推進する。						
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価	
学力の向上	きめ細やかで特色のある幼児教育の提供	・異年齢の関わりを大切にしながら保育を工夫し、展開する。 ・幼児理解と教師の保育力、連携力向上をめざす。	・異年齢の関わりを育むことができる環境の構成や教師の援助について、全職員が連携しあって保育に取り組むよう努める。 ・教師の資質向上のため園内研究会で講師を招聘し保育実践力を向上していく。	・短期指導計画や園庭の環境図について、職員同士の共通理解を図るために、2週に1回協議をする。 ・保護者アンケートで「幼稚園は子供の興味・関心・発達に応じた保育を行うことに努めている」の項目において、肯定的な評価が80%以上になる。 ・保育の質の向上を図るため、講師招聘の園内研究会を年2回実施する。	B	・実際の子供の姿から戸外の環境図を用いて準備を行ってきたが、クラス間でとまり、環境の再構成に関しては一部の職員でしか共通理解ができていない部分があった。異年齢が混ざり合うことができる環境を職員間で連携を深めていく必要がある。 ・保護者アンケートの項目では、肯定的な評価が100%であり、目標を達成することができた。 ・9月と1月に講師招聘の園内研を実施し、各教師が保育実践を振り返り資質向上へとつながった。	・短期案の話し合いの際にクラスだけではなく、異年齢の姿を話す時間を設け、職員同士が意見交換を行い、共通理解を図りながら進めていく。 ・子供主体の保育を念頭におき、引き続き講師招聘の園内研究会を実施する中で、保育点検を行い実践力を高めていく。 ・共同研究園の公開保育や研修会に積極的に参加し、各教師が学びを深め資質向上に努める。	・子供の興味・関心・発達に応じた保育について、肯定的な評価の数値が高いのは素晴らしい。保護者の中には、保育に関するアイデアを持っている方もいると思うので、意見を直接聞く場を設定してはどうかと思った。 ・全職員で共通理解できるよう努力されることを期待したい。
	心豊かにともに育ち合う子供の育成	・子供一人一人が、自分で考え行動するための保育や環境の構成を工夫する。	・研究テーマに基づき子供の姿を捉え、自分で考え決定して行動する子供を育てるための保育を実践する。 ・子供が心を動かし、試したり、工夫したり、探求したりする環境を、教師間で連携し再構成しながら保育を行う。	・自分で考え決定する子供の姿をエピソード記録として出し、全職員でカンファレンスを学期に3回程度行う。 ・保護者アンケートで「子供は、友達や教師と試行錯誤したり、発見・探求したりして遊びを楽しんでいる」の項目において、肯定的な評価が80%以上になる。	B	・エピソード研修は、教職員が1学期5本、2学期7本、3学期3本のエピソード事例を出し、全職員で学期に3回以上のカンファレンスを行うことができた。 ・保護者アンケートでは、「子供は、友達や教師と試行錯誤したり、発見・探求したりして遊びを楽しんでいる」と感じるという項目の肯定的な評価が100%となり、目標を達成することができた。 ・子供が心を動かし、試したり工夫したり、探求したりする環境を教師間で連携し合って作っていくというところは、共通理解が足りない面があり課題が残った。	・子供が心を動かし、試したり工夫したり、探求したりする環境を全教職員で考え合い、共通理解を図る。その上で、教職員で協力し合って環境を整え、保育を実践していく。 ・保育をする中で引き続き、子供が自分で考え決定して行動している姿を捉え、その姿を全職員で共有していくようにする。	・園には子供の興味・関心を引く遊具が多くあり、環境が整っている。引き続き、環境整備を行いながら取り組みを進めて欲しい。 ・子供たちの横のつながりを大切に育てられることを期待したい。
	特別支援教育の推進・充実	・一人一人の個性を大事にし自分らしく表現できるよう、個々の発達段階や課題に応じた適切な指導・援助を行う。 ・子供同士が互いに認め合い、共に育ち合う保育を実践する。	・定期的に、子供の様子や環境について話し合い、全職員で情報を共有する。 ・担任と特別支援教育担当者が子供の実態を捉え個別指導計画を立案し、全職員での共通理解を図る。また、保護者に開示をして、子供の課題に対して園での取り組みや支援方法を伝え、園と家庭との連携を密にする。 ・全園児に対し発達の課題に応じて関係機関や小学校と連携し、集団参加や社会参加において、子供や保護者にとって効果的な援助や支援方法を考える。 ・子供の実態や課題に応じて、クラス活動やにじいろ広場に自信をもって参加できるよう個別の支援を行う。	・子供の様子や課題などを話題に取り上げ、全職員で子供の姿や支援方法について共通理解する場を2週に1回もつ。 ・子供や保護者の支援に活かすために、個別指導計画を作成し、保護者に開示する場を半年に1回もつ。 ・わかばこども園でのにじいろ広場に、最低一回は参加出来るように促す。 ・保護者アンケート「幼稚園は、一人ひとりをあたたかく幼児理解し、個々の発達や個性に応じた保育を行い、共に育ち合えるようにしている」の項目において肯定的な評価が80%以上になる。	A	・子供の様子や課題などを話題に取り上げ、全職員で子供の姿や支援方法について共通理解する場を2週間に1度もつことができた。 ・子供の実態に合わせた個別指導計画を作成し、学期に1回保護者へ開示してきただけで、家庭と共通理解して支援に活かすことができた。 ・わかばこども園でのにじいろ広場に、ほとんどの親子が1回以上参加することができた。 ・保護者アンケート「幼稚園は一人一人をあたたかく幼児理解し、個々の発達や個性に応じた保育を行い、共に育ち合えるようにしている」の項目で肯定的な回答が100%となり、目標を十分達成することができた。	・引き続き継続した支援ができるように、日常の保育の中でも子供の課題や姿、支援方法について職員間で情報共有をすこと共に、月に1回程度全職員で共通理解をする場をもつ。 ・引き続き保護者との連携を大切に、個別の指導計画の内容を共通理解しながら保育実践につなげていくために保護者に開示する場をもつ。 ・わかばこども園でのにじいろ広場の良さを伝えながら、1回は参加できるように促していく。	・園の取り組みが保護者に肯定的に伝わっていることを嬉しく思う。 ・近年支援を要する子供たちが増加している。個々に対応した保育を職員共通理解のもとで行ってほしい。
豊かな心・健やかな体	豊かな心・思いやりの心の育成	・身近な人との関わりを通して、自尊心や他者を思いやる心を育む。 ・飼育活動や自然と関わる機会を大切に。命の大切さや尊厳に気づく保育を行う。	・異年齢の関わりの中で、優しさや思いやり、感謝の気持ちに触れる。 ・一人一人を十分に認め、自分や友達にやさしく接し、互いに思いやりをもって接することができるように保育を実践する。また、子供の意欲や取り組みの過程を認め、安心して自己発揮できるように保育を進める。 ・花や野菜の生長や身近な生き物の飼育を通して、生命の大切さに気づき、収穫の喜びや飼育物に愛情深く関わる経験が感じられるようにする。	・毎日の保育の中で、異年齢の友達と関わることで優しさや思いやりをもって行動するようになる。 ・保護者アンケート「子供は自分を大切に、友達や周りの人を思いやる気持ちをもつことが出来るようになってきている。」「子供は、生き物や植物などの自然に興味関心をもったり、命の大切さを感じたりするようになってきている。」の各項目で80%以上の肯定的な評価となる。 ・花や野菜の生長が感じられるように水やりや観察を毎日行う。 ・生き物に対して愛情をもち、命を大切にすることを育むために、飼育物の世話を毎日行う。	A	・保育室を自由に行き来できる環境にすることで、自然に異年齢と関わる様子が見られた。また、運動会や参観日などの行事を異年齢で取り組むことで、年上の子はリーダーシップや思いやりを育み、年下の子は信頼感や憧れを抱くことができた。 ・保護者アンケート「子供は自分を大切に、友達や周りの人を思いやる気持ちをもつことが出来るようになってきている。」「子供は、生き物や植物などの自然に興味関心をもったり、命の大切さを感じたりするようになってきている。」の各項目で肯定的な回答が90%を超え、目標を達成することができた。 ・季節の野菜や花の生長を楽しみに毎日水やりをし、野菜を収穫することで、植物に関心をもつことができた。 ・ウサギや昆虫の世話をすることで、命の重みやそれぞれの生き物の特性を理解するようになった。	・自然と豊かな人間関係を築いていけるようにするために、今後も異年齢との関わりが自然とともなる環境を継続していく。また、行事などを通して積極的に関わる機会を設定する。 ・生命の大切さを感じられるようにするために、生き物の飼育や栽培活動を保育に取り入れる。	・子供の心を豊かにする取り組みが保護者に伝わっていると感じている。今後も努力を続けてほしい。 ・園には生き物や植物など、子供の命の大切さを教える環境が整っている。興味関心を持たせる取り組みの中で、職員の出前授業など幼小の連携をうまく活用してほしい。
	基本的な生活習慣の確立	・基本的な生活習慣の確立をめざし、自分の体を大切に子供を育てる。	・基本的な生活習慣や自らの健康に関心をもてるよう発達に応じた内容の「ほけんの話」を設ける。 ・「ほけんの話」を実際に家庭でも行うことができるように「けんこうカレンダー」を実施する。 ・保護者寄発として「ほけんの話・ほけんだより」を配信し、健康教育についての発信を行う。	・園と家庭が連携するために「ほけんの話」をする時間を月1回は設け、その内容を「けんこうカレンダー」を活用して家庭でも取り組む機会をもつ。 ・保護者アンケート「子供は、基本的な生活習慣や健康な生活について意識し、自分の体を大切にしようとしている」の項目で肯定的な評価が80%以上になる。	B	・月1回時期や発達に応じた「ほけんの話」を継続して行った。また、その日に「けんこうカレンダー」を実施し、家庭と連携することができた。 ・「ほけんの話・ほけんだより」を月1回配信し、保護者寄発を行った。 ・アンケート結果が目標の80%以上の肯定的な意見があった。しかし、あてはまらないという意見も少数であった。	・「けんこうカレンダー」があることで子供のやる気につながっているため、今後も健康に関心をもてるように内容を工夫し実施する。 ・「ほけんの話」の内容や「ほけんだより」を配信して家庭につなげていく。 ・「基本的な生活習慣」を身につけていると保護者が感じられるよう内容を検討し、今後も寄発を行っていく。	・基本的な生活習慣を身につける大切な時期だと思う。個別対応しながら、職員全員で協力して取り組み、保護者からの評価を得てほしい。
開かれ信頼される学校園	安全・安心な園づくり	・日常的に様々な事象に対する意識を高める。 ・安全点検及び日常のヒヤリハットを共有し、即、改善に努める。 ・様々な事象を想定した訓練、振り返り、改善を行い、園々としての力、集団としての力をつける。	・危機や危険がないかを確認、共有するために安全点検を月1回行う。日常のヒヤリハットはその都度職員間で共有し、対策をすつ以上考え、実施する。 ・様々な訓練で状況に応じた避難方法を知る機会を年間5回以上もつ。	B	・安全点検の日を決めて安全点検表を配布し、職員が分担して取り組むことで、意識して点検することができた。 ・安全点検で異常が見られた箇所や子供にとって安全ではない場所については施設課等とも常に連携し安心・安全な場所となるよう修繕・改善を行ってきた。また、十分ではない場所もあるため安全で安心して過ごせる園となるように連携を図る。 ・様々な訓練を年間7回行い、状況に応じた避難方法を知れるよう職員間で話し合ったリシミュレーションしたりしながら取り組めた。	・子供にとって安心・安全な園となるよう今後も教育委員会と連携を図りながら、安全管理に努める。 ・気が付いたことはすぐにタイムリーに対応し、まず自分たちでできることを考え取り組んでいく。 ・ヒヤリハットの共有を今後も続けていきながら、軽微な変化にも気付くように意識をもつ。 ・子供を中心とした避難訓練は引き続き継続して行う。また、次年度は職員が自分の身の安全を守る護身の訓練に取り組んでいく。	・安全に安心して生活できる園内は何よりも大切です。教職員の危機管理の訓練や危険箇所のチェックなどを引き続き行ってほしい。	
	幼稚園情報の発信	・保護者、地域等、幼稚園情報の発信に努める。	・園での子供の様子を、GoogleClassroom、HP、動画配信で伝え、園の教育活動への理解を促す。 ・有岡小学校との交流、民生指導委員との交流を通して、園児の様子や保育内容について紙媒体での情報発信をする。	・GoogleClassroomやHP、動画配信などで子供の様子を月4回以上発信する。 ・園の教育内容や子供の様子、遊びの中での学びなどをありったけよりクラスだよりなどを学期に1回以上発信する。	B	・HPは各月の行事において全職員が関わるようになり、慣れない作業に時間がかかることもあったが協力して取り組めるようになり、月4回以上発信することができた。 ・園の教育内容については保護者に十分な説明が足りず、疑問や不満を感じてしまうことがあった。問題が起きたときにはその都度丁寧に説明し、個別に関わることで理解が得られるようにしてきたが、全体への発信としてももう少し丁寧にする必要がある。	・今年度全職員で関わるようになったHPの作成を次年度も引き続き取り組み、全員が自分であげることができるよう技術を習得する。 ・次年度、新しいシステムが導入された際には積極的に活用する。 ・子供や保護者一人一人と丁寧に関わり、変化する教育内容やありおか分園ならではの教育に理解が得られるような発信に努める。	・日々、情報を発信することは大変だと思うが、引き続き努力を期待したい。
	子育て支援事業	・家庭と地域と園で連携した子育て支援の推進を行う。 ・子育て支援の場として、園庭開放、預かり保育を進める。 ・保護者同士のつながりができるような機会を持つ。	・通常保育後、長期休業中の園庭開放を行う。 保護者ニーズも把握しながら、園の遊具や用具なども活用できるようなルール作りをする。 ・みんなのひろばや園庭開放等の機会を活用し、地域の方に園のことをよく知り、親しみを感じてもらえるように働きかけていく。	・園庭開放をしていることをアピールし、園児だけでなく地域の児童や就学前の子供たちも遊びに来られることを伝えて毎日行う。 ・PTA活動を通して、保護者同士のつながりがもてるようにPTA役員会でボランティア活動などを企画する機会を学期に1回以上もつ。	B	・園庭開放については利用の数が1学期に延べ97人、2学期は11人と少なかった。天候が暑すぎたことや子供の暑い事が多く園庭開放に来る時間がない子も多い。降園せずそのまま遊ぶ日を週に1回設けているが、それを増やすことで園庭開放の利用が増えるが、検討の余地がある。 ・PTAのボランティア活動として誕生会のおしりや園芸などに学期に1回以上取り組んだ。同じ人が取り組んでいることも多いが、声をかけると手伝おうとする保護者もいる。保護者の負担にすぎず、楽しめる活動が今後もPTA役員と共に計画することを継続する。	・園庭開放の利用者数を増やす方策として、気候のよい時に遊びやすいよう、降園後そのまま遊ぶ日を週2回に増やす。 ・PTA役員を中心に保護者のニーズを把握し、関わりたくなる、やってみたいと思うボランティア活動を探り、主体的に参加しようとする機会をもつ。 ・ボランティアに参加してよかったことなどを保護者間に発信してもらうことで、次は主体的に参加してみたいと思えるような活動になるように支える。	・引き続き努力を期待したい。

学校関係者評価総括
 ・施策・目標に対する成果と課題の分析がしっかりと行われていると感じる。それが、的確な改善策につながっていると感じる。
 ・園に足を運び、子供たちの様子を見ることと安心することが多い。2月の保育参観では子供の成長が著しいと感じた。今年度、子供同士では「音楽会」「おもちゃランド」「給食の試食」、教師間では「市指定研究会」への参加や「ありんこcafé」への参加など、コロナ後に小学校との関わりが増えた。小学校からも分園に足を運び、次年度も引き続き子供同士の関係や職員同士の関係深めていって欲しい。

次年度に向けた重点的な改善点
 ・これからも、思いやりの心や生命の尊厳がわかる教育を行って欲しい。
 ・安全・安心な園づくりを考える上で、災害発生時における対処方法を考えておくことも肝要である。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った